



日々是好日

とある人間の日々

三浦礼未

日々是好日

なんということもない 朝が来て
なんということもない 昼が過ぎ
なんということもない 夜が来る

ろくでもない 朝が来て
ろくでもない 昼が過ぎ
ろくでもない 夜が来る

平穩無事な 朝が来て
平穩無事な 昼が過ぎ
平穩無事な 夜が来る

朝が来るから 起きだして
昼が来るから 仕事して
夜が来るから 布団に入る

あたりまえの 一日

でも

ほかのだれにもない 一日

まあ
いいんじゃないか

こういう人生も

青空にトンボの群れ

秋彼岸

墓参り

緑の里山から

ふと見上げれば

やっと

むちゃくちゃな暑さの抜けた

青空に

トンボの群れ

まだ

赤くないのが

残念

ああ

空が広い

昔母親が言っていた

ホントかうソかわからない話

でも

こんな日には

そんなことがあっても

おかしくないかもね

トンボの群れを

見上げたら

ほら

ずっとむこうに

ぽっかり

銀色の未確認飛行物体でも

浮かんでそうな

青い空だ

ねえ

そこから

見えている？

冬のある夜

勝手に旅立っていった貴女

もう一度

見たかったよ

この

青い青い空を

一緒に

……

ほら

大気圏の底から

見上げる

無限

トンボ

高く高く

突き抜けろ

やだねえもうwww

ビネツハツネツ

ハツネツビネツ

どこがどうしてこうなった

って

たまには
あらあな

アラームあらま

人間
先のことなど
わからない

キレイなものが
スキになり

イヤなものに
なぜかなる

やけぼっくいに
火がついて

ビネツハツネツ
ハツネツビネツ

さて
リトル
道成寺
となったら

オタチアイ

(^-^)

秋

燃える
深紅の炎

黄金色の散華

さらさらと
ちらちらと
舞い踊れ
降れ

落ちて行け

大地に
土に
道に
アスファルトに

大気は高く
宇宙の底は透明に
どこまでも青い

鮮やかな命の名残が埋め尽くす

とりどりの装いを失って
天に突き上げる
黒く錯綜した
とげとげしい骨格

しかし
ひとふゆの
眠りを越せば
そこからまた

やわらかな
みずみずしい
命が芽吹くだろう

今はただ

埋もれていけ

色あせた

埃だらけの

傷ついた

路（きおく）

彩れ

この年の最後の

化粧（けわい）

華やかに

燃え尽きろ

ゴメンネの痕跡（カケラ）

見つけた

庭の白梅が
曇まじりの氷雨に
散りいそぐ

あの日と同じ

さえざえと
冷えた
部屋の
陰

ひそやかに
結晶していた
コトバ

消えかかった
淡い
後悔の
痕跡（カケラ）

「ゴメンネ」

見ていない

時という潮流が
またたく間に流し去った
記憶

畳の上に広がる
真っ赤な命の
痕跡

突然
投げ込まれた

非日常と

なにげなく

再び

怠惰に続いていくだけの

日常

その狭間に

こぼれていた

あなたの

最後の

コトバのカケラ

聞いたものはいない

見たものはいない

そばにいたものはいない

ヒトりで

夕闇の中で

流れ出る

温かな赤い命の感触を

感じながら

取り戻せない

時に

気づいて

つぶやいた

「ゴメンネ」

泣きながら

「ゴメンネ」

・・・自嘲

そんな
取り残されたものの

モウソウ

あるいは

ネガイ

生きていてほしかった

くりかえし

浮かぶのは
笑顔

そして

なにもできなかったという
後悔

うん
確かに
聞こえた

冷えた空気の沈む
夕闇の中に
刻印された
痕跡（カケラ）

「ゴメンネ」

かすかな嗚咽とともに

後悔したくなかったら

勝手に死なない

勝手に死ぬと

後悔が残る

家族に

恋人に

親友に

そして

自分に

自分を殺せる力が残っているなら

生きることに使え

死ぬことが限りなくマイナスなら

こけても這いずっても

生きてりゃ少しはプラスになる

マイナスよりプラスのほうがいいじゃんね

人間なんざ格好悪いもの

恰好悪くたって

へたれてたって

生きてりゃ前に進めるさ

前に進めりゃ

少しはいいことがあるかもしれない

ちっとはいい思いができるかもしれない

苦勞ばかりが続くわきゃない

苦勞の合間に少しでもいいことがありゃ

御の字

だから

すごくとんでもなくいいことって

有難いって

感謝するんだよ

ねえ ほら

後悔より

希望のほうが

いいじゃんね

あとがき

最初は生活密着型で書いてみようかと思ったのですが…。最後の最後で、ちょっと違った方向になりました。

【初音ミクオリジナル曲】 私の痕跡 【キセノンP】

<http://www.nicovideo.jp/watch/sm12865526>

が私の背を押したからです。

お読みになればわかるように、私のごく近くで起きた出来事がありました。本人も周囲の私たちも、必死に何とかしようとして頑張って頑張って、結局どうしようもなかったという事実。それだけが残りました。

忘れることはできません。残った人間はその事実を引きずったまま、おそらく一生を送ることになるのです。

鬱病は決して甘えたり怠けたりする人間がなるものではありません。自殺する人間は弱いからそうなるものではありません。むしろ逆です。やりたいことがいっぱいあって、そのすべてを自分が満足がいくよう完遂したい。それなのにどうしても思い通りにできない。やりたいのにやれない。やれない自分を自分自身で責める。耐えられなくなる。そして自分を殺せるだけのエネルギーがある時に自殺するのです。鬱病は治りかけが難しいといわれているのはそういうことです。朝出かけるまで生きていた人間が、帰ってきたら冷たくなっている。病死ではなく、止められたかもしれない状況があったのに…。この後悔は決して周囲の人間にとって消えることはありません。

キセノンP氏の『私の痕跡』の優れているところは、あの最後の一瞬に、目前にして失った一つの命の衝撃…というより虚しさ、悔しさ、腹立たしさ、断ち切られた時と命への思いを迫体験させてくれたところにあります。実際、その事実を前にした時、悲しさなんて出てきませんでした。少し経ってからですね。落ち着いてからの話です。

だから、最後にメッセージを入れておきました。実に詩としては不完全なものですが、自分を殺せるくらいのエネルギーがあるんだったら、それを生きることに向けてみる。というもの。

たぶんなんですけど、実際に自殺を企てて、引き戻せないところに来てしまった時、かなりの人間が後悔しているんじゃないかと思うんです。キセノンP氏の青空に飛び出してしまった女の子と同様に。

『ゴメンネ』というのは葬式の後しばらくして感じたこと。彼女ならそうだったんじゃないかと

いう確信です。幽霊は見ていませんし、声も聞いてはいませんが。そして、この詩はキセノンP氏の動画をきっかけにして生まれたanswerです。

当事者の少女を描いたのが『私の痕跡』なら、残された立場の人間の思いを描いたのが『ゴメンネの痕跡（カケラ）』だからです。

ということで、ちょっと重すぎるので言葉遊びで作ったお遊びの詩も中に入れておきました。内容は創作です。そういう色っぽい話があればいいんですけどね。ネット風の間も入れてみましたがどうでしょう。

まだあと少し詩を足したかったんですが、どうしても出てきそうもないので、一応この形で発表します。どうぞよろしく願いいたします。

2010. 12. 4 (土) 三浦礼未